



＊いよいよ 11 月 22 日中学生たちは宮原
 司教より堅信の秘跡を受けることになりました。その日に向かって4月から歩み始
 めた受堅者を始め、保護者の皆さん、7名
 のリーダーも、子どもたちにとって準備の
 締めくくりと同時に信仰の旅において新
 しい出発となるこの日を、喜びと期待を
 持って待ち望んでおられることでしょう。

◆以上の言葉は、不思議なところで、珍し
 い時間に私の頭を過ぎったものです。
 一病院のICUの真夜中です！ICUだから静
 かなところだと思っていたのですが、実は
 夜になると、結構にぎやかなところになり
 ます。生と死の谷間をさまよっている人々
 が静かでも、命を守り、支えようとする機
 会が様々で、異なった音をたてているため、
 ICUの夜は不協和音の音楽の劇場に変身
 します。(ちょっと大げさですけど！) —
 苦しいからか、不安のためかやまない赤ち
 ゃんの泣き声。一命の糸を必死に引きとめ

ようとする老人のうめき声。—「右へ曲が
 ります。ご注意ください」サイレンを鳴ら
 しながら病院に近づいてくる救急車。—
 その中で時々、咲く花のように鳴り響いて
 いる看護師の若い笑い声。ここには本当に
 憐れみ深い父なる神がおられることを感
 じます。本当にそれぞれのベッドの傍ら
 にイエスが立っておられ、人の手を握った
 り、額の汗をふいたりして「君は一人ぼ
 っちじゃない」と苦しみもだえている人々
 の一人ひとりに耳元でささやいている。—
 そうだ。ここはゴルゴタの丘の一つです。



教皇フランシスコの言葉が頭を過ぎりま
 す。「教会が戦場で戦いが終わった後の
 前線の病院であってほしい」と。教会、
 主イエス・キリストの教会の何と美しい
 姿か……。

*このように思い巡らしていると11月22日、堅信の秘跡を受けようとする子どもたち一人ひとりの顔やしぐさが目に浮かびます。父なる神の目にも彼女ら彼らは可愛く愛おしく映っているに違いありません。神はご自分の計り知れない慈しみ深い愛で、この受堅者を満たしたい気持ちがよく



分かります。

—「教会の歴史を振り返り—特に日本の教会における素晴らしい証し人たちのことから学びながら、主イエス・キリストを礎にして生きる」ことをテーマにして共に考え、祈ってきました。しかし共に準備した間、どこまで神の「心」が伝わったのでしょうか。どこまで子どもたちはイエスの眼差し—福音—の温かみを感じたのでしょうか。—「しるし」となる秘跡を受けることによって聖霊に満たされること、子どもたちの頭と心にその素晴らしいことが通じるように、こちらの努力は本当に足りたのでしょうか。もちろんリーダーたちも私もできなかったことを保護者の方が補ったことでしょう。さらに、堅信の秘跡を受ける意志を自由に表明し、準備の集まりに出席してきた子どもたちの中ですでに聖霊が働いておられることを確信

しています。4月からの私たちの共同体の祈りの支えと力をも忘れていません。それにしても気になることが一つあります…。



◆「移動ですか?」「はい。一般病棟へ、まずナース・ステーションの隣ですよ」と。わかりました。今まで通り素直に指示に従おうとすれば次第に普通の病室へ、そして退院へ、さらに11月22日へと。病棟に着いてしばらくしてから「ベリオンさん楽しい本を読んでいるの?顔にはほほえみが浮かんでいますよ」と。看護師にどのように説明すればいいのか。実は詩編の「天を仰ぎ見て」と読んでいて、ふと「自分はこの頃天井ばかり見上げているのだね」と思っていたところでした。

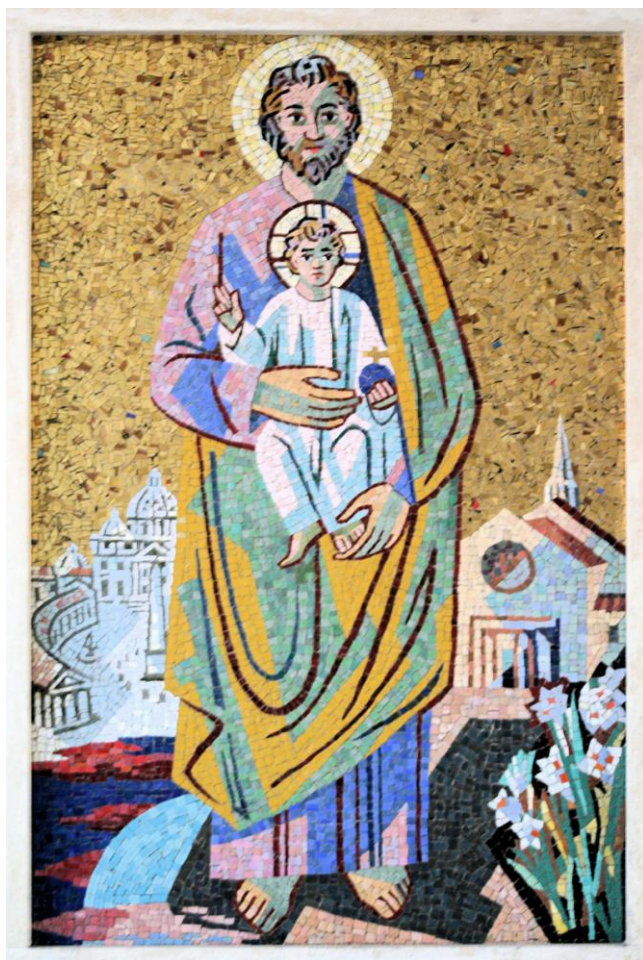
*あ、そう。堅信の秘跡を受ける子どもたちのことで気になること。主日の感謝の祭儀に参加するためにしろ、堅信の準備の集まりに出席するためにしろ、子どもたちには大きなハードルを乗り越える必要があ



ったようです。それは時間の調整です。もっと正確に言えば、他のことが優先されると「教会」(主イエス・キリストを信じて生きること)との関わり合いは犠牲になるということです。「部活動」のせいにならないようにしましょう。「部活動」には何の責任もないからです。—保護者の皆さんもご存知のようにキリストを信じる者として生きるにあたって子どもたちは大人になるにつれて「部活動」よりはるかに高いハードルを乗り越えるように呼びかけられるようになるでしょう。若いころから子どもたちは大事な選択に直面する時に「教会」のことをおろそかにしても差し支えない、という印象を受けるなら、イエスと共に人生を歩み続けることができるはずがありません。—堅信の秘跡を受けるための準備期間は将来に向かっての一種のトレーニングでもあったことをどこまで理解されたのでしょうか。

◆「ペリオンさん、教会で結婚式をされているの?」「はい、そうですよ」「ワー私の時もよろしくね!」「いつでもどうぞ」と笑いながら答えると、「マジ!皆行橋教会に来れば忙しくなるね」と…。

*あ、そして保護者の皆さん、最後に一言。皆さんのお子さんたちの堅信の秘跡に向かっての準備にリーダーと一緒に協力させていただいてありがとうございました。



—それにちょっとキザですがもう一つ付け加えさせてください。

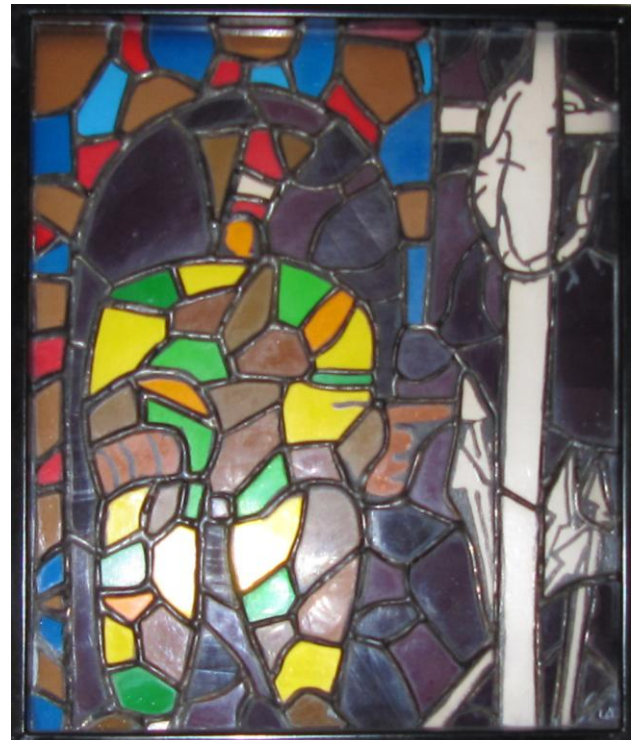
長男だった私が子どもの頃、兄弟が生まれると必ず親戚の家に預けられていました。赤ちゃんの誕生は神秘に包まれていました。性と赤ちゃんの誕生との関係について話すことがタブーだった時代に赤ちゃんとの出会いは質問を湧き起こさせる時でした。

—当時、私の地方では家によって赤ちゃんが生まれていたのはバラや大きく美しいカリフラワーの中からか、こうのとりによって遠くから運ばれて来るからか、でした！よくもまあとは思いますが、今日教会の中で別の誕生について…タブーまで行かないにしても—あまりふれられていないことが一つあるような気がします。それは司祭や修道者の誕生に関することです。



「召命のために祈りましょう」という漠然とした運動がありますが、皆さんははっきり言わせてください。皆さんのご家庭からしか司祭や修道者が生まれてきません。保護者として自分の子どもがその道を選ぶことを望んでおられるでしょうか。それ

が実現するための手段を選び、その道が開かれるようにご家庭で何かを心がけているでしょうか。もちろん、人を攻めることなど私には毛頭ありません。ただ、司祭も修道者もバラやカリフラワーの中で生まれるものでもなければこうのとりによって運ばれるものでもないことを新たに認識していただければ幸いです。



◎受堅者の今の心境はどうなっているのでしょうか。

生命を助けられた自分の気持ちに似ているのであればとてもうれしく思います。巢のかたわらに広げた翼をはばたかせながら、初飛行に挑もうとしている若鳥のような気分です。期待と不安を伴う巣立ちですがいのちの主^{しゅ}に常にしがみつきのながら、絶えず感謝しながら、神の子として生きていこうとすれば有意義な人生を送ることができるに違いありません。